

R・D・アンダーソン著
安原義仁・橋本伸也監訳

『近代ヨーロッパ大学史』

——啓蒙期から1914年まで——

昭和堂 二〇二二・一一刊
A5 四二四頁 六〇〇〇円

フンボルト理念として象徴化される学問の自由、あるいは教育と研究の統一は、現今の大学にとっていっそう重要な議論的になつてゐる。このような原理をもたらし近代大学の起源として、著者アンダーソンはベルリン大学創設という転換点を認めつつも、それに先立つナポレオン改革や、さらにこれを準備したアンシャン・レジム期と啓蒙主義時代から近代のヨーロッパ大学史を語り起こす。ここから一九一四年までの各国の大学をめぐる状況を総合的に描いた本書は、近代国家とともに形成された高等教育機関としての大学の理念と実態を、政治的また社会的な動きとともに知る上で格好の手引きとなるだろう。

全二〇章からなる本書のうち、第一章から第四章は前述の近代初期からドイツとフランスにおける近代大学モデルの成立までを扱い、第五章以降では一八四八年革命や宗教との関連、そして各国が試みた教育改革と大学整備が主題となる。それぞれの国家はその政策と社会的需要に応じて二つのモデルを選択的に取り入れたため、これに伴う大学拡張の時期や規模、またエリート層の形

成に際して大学が担う役割も地域により異なつたものとなつてゐた。個々の相違をもたらし要因から結果までが、明解に整理されたかたちで読者に提示される。

第一〇章から第一六章においては、一九世紀後半の大学をはじめとする高等教育制度の展開が、とりわけナシヨナリズムとの関係に重点を置きつつ論じられる。その対象は西欧諸国に加えてハプスブルク諸邦やロシア領にも及び、北欧やバルカン半島およびギリシアに關しても、そこで大学に求められた機能や、ユダヤ人や労働者階級出身学生といったマイノリティの位置づけまでが考慮されている。

ドイツ・モデルに基づく大学理念が世界的な広がりを示し、さらに活発な改革と拡張をみた画期が、「二八七〇年頃の数十年間」であつたとアンダーソンは述べる。第一七章においてはこの頃新たに大学に登場する女性の存在、第一八章では構成員の日常生活や政治的活動と密接な関係にあつた学生団体、そして第十九章では知識人意識や民衆への関わりに焦点が当てられ、それぞれのテーマについての入門としても有用である。第一次大戦前後の大学をめぐる状況を概説する第二〇章「結章…一九一四年のヨーロッパの大学」に至る叙述は、本書の中でもとりわけ緊張感と刺激に満ちており、国家の利益との同一化・ブルジョア文化との一体化という当時の大学が辿つた軌跡は、高等教育の大衆化を経て良くも悪しくもグローバル化の様相を呈しつつある現代に対しても訴えかけるものが多い。興味のある向きには中世から戦後までを概覽し、特に邦語の参考文献表を備えた『大学の歴史』(シャルチエ

／ヴェルジエ著、クセジュ文庫）とともに御一読をお薦めしたい。

（中田恵理子）